

「壮大なる耳目の世界」(下) : ワーズワースの空間 感覚、其他について

前川, 俊一

<https://doi.org/10.15017/2332804>

出版情報 : 文學研究. 64, pp.1-33, 1967-03-25. 九州大学文学部
バージョン :
権利関係 :

「壮大なる耳目の世界」(下)

——ワーズワースの空間感覚、其他について——

前川 俊 一

I

「序曲」第一巻の冒頭は緑の野から、雲間から、天空から吹き来って作者の頬をなでる「そよ風」の敘述にはじまっている。そよ風はおだやかではあるが、廣大無辺の空間にわたる大気の動揺である。それは空の雲の動き、嶺の背後から湧出するかのような山塊の動きと同様、詩人ワーズワースの感覚に訴えることの強烈な自然現象であった。彼はこのそよ風を形容して「天のかぐわしい息吹き」*'the sweet breath of Heaven'* (I, 41) と言っている。太古の昔から人類は人の息吹きに生命の神秘を感じていた。創世記には「エホバ神土かみつちの塵ちりをもて人を造り、生氣いのちいきをその鼻にふき入れたまえり。人すなわち生靈いけものとなりぬ。」とある。英語で精神、靈、心を意味する *'spirit'* は、フランス語の *'esprit'* と同様、ラテン語の *'spiritus'* に由来する語であるが、*'spiritus'* は更に、「呼吸する」を意味するラテン語の動詞 *'spirare'* から来たっている。ワーズワースにとつては、この「天の息吹き」の訪れは、直ちに彼の内心に敏感な反応をよびおこす底の、インスピレーションの訪れでもあった。彼はうたう——

I.....while the sweet breath of Heaven

Was blowing on my body, felt within

A corresponding mild creative breeze,

(天のかぐわしい息吹きが私のからだに吹きつけている間に、私はそれに応える創造の微風を身の内に感じた。)

かく、そよ風を人間の息吹きにたとえた作者は、今度は己れの身のうちに湧きおこる詩的創造活動を「自然」のそよ風にたとえている。「逍遙篇」の第四卷六〇〇行には

The breeze of nature stirring in his soul

(「自然」のそよ風が彼の魂のうちにそよぎ)

と、まるで自然界の微風が彼の身のうちに吹き入って、彼の魂をそよがせるかのような書き方をしている。また「序曲」第二卷二四四行以下には、母親との接触を通じて嬰兒の身のうちに精神活動が目覚め行く有様を描いて

Such feelings pass into his torpid life

Like an awakening breeze

(そのような感情が、眠りを目覚めますそよ風のように彼の昏睡のいのちにしのび入り)

とやはりそよ風の比喩を用いている。このようなワーズワースのそよ風に対する異常な関心は、詩的感興の訪れをイオリアン・ハーブの高鳴りにたとえる比喩をも生み出すにいたっている。しかしワーズワースにとっては、先にも触れたように、風神の訪れは単なる比喩としてではなく、文字通りに彼の心に詩的感興をよびおこす霊的な力をもつたのである。「そよ風」「breeze」がその動きを強めるとき、「wind」となり、更に「storm」となつて、集塊の運動のワーズワースに与える重圧感是一段とたかまる。ワーズワースは強風に言い知れぬ魅力を感じ、それに詩作の機縁を見出すことが珍らしくなかった。「I wandered lonely as a cloud」も、そのもとづく原体験となつたものは、嵐気味の

強風下になびきひるがえるブルズウォーター湖畔の水仙の群の景観であつた。J・トムソンの「懶惰の城」のポケット版に書き入れた詩章の中に描かれている主人公について、ワーズワースは

Full many a time, upon a stormy night,

His voice came to us from the neighbouring height.

(幾たびとなく、嵐の夜に、彼の声が近くの高みからきこえて来た)

とうたっているが、隣人どもをいたく驚かせ、不審がらせたこの若者は、実は作者自身の分身のように思われる、妹ドロシーによれば「星明りの夜の散歩と冬の風」は詩人ワーズワースのこよなく愛するものであつた。彼はまた「逍遙篇」第一卷二八〇行以下に「放浪者」の青年時の心境を敘して

..... before his eighteenth year was told,

Accumulated feelings pressed his heart

With still increasing weight; he was o'erpowered

By nature.....

Full often wished he that the winds might rage

When they were silent: far more fondly now

Than in his earlier season did he love

Tempestuous nights — the conflict and the sounds

That live in darkness.

(彼が十八の年を数えるまでに、感情が積み重なり、重みを不断に加えながら彼の心を庄したために、彼は「自然」に

圧倒された。……幾度か彼は、風が凧いでいるとき、荒れ狂うことを望んだ。彼は暴風雨の夜を、暗黒のうちにうごめく争闘とそのひびきを、幼い時分にはるかに増して愛好するようになった。

と語っている。彼はまた「序曲」第七卷五〇行以下に

…… my favourite Grove,

Now tossing its dark boughs in sun and wind

Spreads through me a commotion like its own,

Something that fits me for the Poet's task.

(いま日光と風をうけてその暗い大枝をゆるがせている私の気に入りの木立は、その動きに似た動きを私の身のうちに波及させるが、これは私を詩人の役目を果すに好適の状態にさせる。)

ともうしている。しかしこのような強風と彼の詩心とのつながりは青年時に限らない。彼が幼少時に覚えた幻想的な経験として「序曲」の中で回想されているものは、よくこのような大気の激動がその背景をなしていることが認められる。たとえば彼がまだ六才に達しない頃に経験したという、下僕と離れ離れになって原野をさまよっている間に人殺しが処刊された現場にぶつかって、驚いて盆地をかけ上ったときに目にした眺めは

…… the naked Pool,

The Beacon on the lonely Eminence,

The Woman, and her garments vex'd and toss'd

By the strong wind.

— The Prelude, XI, 313-6.

(荒涼たる池、淋しい丘の烽火、くだんの女と、強風にその女のころもが悩まされ、ひるがえるさま……)

とあつて、この「visionary dreaminess」が強風の条件下にあつて現出したことをものがたつてゐる。また彼が十三才から眺めた光景は、その後幾度となく彼の心眼によみがえつて、彼の詩的靈感の源泉となつたと、ワーズワース自身がつつてゐるが、「序曲」にその経験を語つた個所には

…the wind and sleety rain

And all the business of the elements.

— The Prelude, XI, 376-7.

(風とみぞれ交りの雨、そして四大のあらゆる活動)

とあつて、これまた烈しい雨風の条件下に現出したことを証拠立ててゐる。

このように大氣の動揺が彼の心をとらえ、詩作の心境に彼をいざない、あるいはこの動揺に結びついた光景を強く彼の脳裡に印して後年の詩作の素材となつたのは、一つにはそれが「物」でありながら「物」らしからぬ性質をそなえ、感覺を通じて彼の幻想的な傾向に訴えるところが強烈であつたためであろう。大氣や大氣の動きそのものはわれわれの肉眼ではとらえられない。しかしその動きに触れる物体——草木のなびき、雨足、草原や丘の斜面を移動する雲の影など——によつて間接に視覚でとらえられる。また大氣の動きは、われわれの肉体に触れるときの頬の感觸と冷暖の感覺を通じて、また葉ずれの音や虚空にひびく鋭い風音によつて、聴覺を通じて知覚される。このように間接に感覺を通じてとらえられる点で、それは精神現象に似てゐる。その上、そよ風にせよ、強風にせよ、嵐にせよ、それらは広大な空間にわたる動きであつて、その果てるところを知らない。そのうごきが觀察者自身をもまぎそえにしながら、無限の空

間につらなっていることが、ワーズワースの想像力に強く訴えたのであろう。

もともとワーズワースは空間的感覚と結びついた物音に特に神秘的な感じをそそられる傾向が強かった。彼は「郭公く」の短章の中でこの鳥に呼びかけて

Shall I call thee Bird,

Or but a wandering voice?

(僕は君を鳥と呼ぼうか、それともたださまよえる声と呼ぼうか。)

とうたっているが、それについて作者自身が説明を加えて

「この簡潔な問いは郭公の声のいづくにも存在するかのような感じ、‘the seeming ubiquity of the voice of the Cuckoo’をよくあらわしている。そしてその生き物から形体的存在を殆んど消し去っている。想像力がその力をこのように行使するようにうながされるのは、郭公は春の季節を通じて殆んどいつもきこえるが、それが肉眼にとらえられることが稀なことを記憶のうちに意識しているからである。^(註)」

とあるのは、このようなワーズワースの心性をよく物語るものであろう。「西にあゆむ」の中に言及されている、スコットランドの田舎人から耳にした異様な挨拶の言葉

Are you stepping westward?

がワーズワースの胸裡に呼びおこした神秘感も、燃えかがやく西空を背景にして、日没直後の異様に澄みきった大気が、広大無辺の空間のひろがりやを彼に痛感させる情況にあつたからであらう。

しかし「物」の非実体的、夢幻的な趣きをもつとも顕著にあらわし、彼の神秘感に特に強く訴えたものは、風に結びついた音、強風が岩間に、あるいは虚空にひびかせる物音であつた。

I would walk alone,

In storm and tempest, or in star-light nights
Beneath the quiet Heavens ; and at that time,
Have felt whate'er there is of power in sound
To breathe an elevated mood, by form
Or image unprofaned ; and I would stand,
Beneath some rock, listening to sounds that are
The ghostly language of the ancient earth,
Or make their dim abode in distant winds.
Thence did I drink the visionary power.
I deem not profitless those fleeting moods
Of shadowy exultation : not for this,
That they are kindred to our purer mind
And intellectual life ; but that the soul,
Remembering how she felt, but what she felt
Remembering not, retains an obscure sense
Of possible sublimity, to which
With growing faculties she doth aspire,
With faculties still growing, feeling still
That whatsoever point they gain, they still
Have something to pursue.

— *The Prelude*, II, 321-41.

(私はよへ、嵐に、大時化に、また星明かりの夜の静かな空の下を、ひとり歩むのであった。そのとき、すがたかたち

に汚されない物音に心をたかめる力のあることを感じた。またよく岩蔭に立つて、老いたる大地のおぼろげな言葉である音、あるいは遠くの風をそのさだかならぬ住家に行っている音に耳かたむけた。そういうものから私は幻想の力を飲みほしたのである。こういう影のような歡喜のつかの間の気分も無駄に終りはしなかつたと私は思っている。というのは、そういう気分がより純な心や知的生活に縁があるからでなくて、魂がどういふ風に感じたかを憶えていても、何を感じたかを記憶せず、いたり得べき崇高さをおぼろげながら意識にとどめ、心の機能が成長するにつれてこの崇高さを追い求め、たとえどんなものを獲得しようと、たえず追求める対象のあることを、機能の成長とともにたえず感じつづけるようになったからである。

幼少時のワッツワースはここに言及されているような自然現象から強い感動を受けとりながら、その感動自体が何を意味するかをはつきりとはつかみ得なかつた。しかしこのような「物」にして「物」にあらざるもの、すがたかたの拘束から脱却し、その故にもつとも非実体的であり遍在的である自然現象のうち、「物」の世界を通じて精神的な世界を把握する手がかりのようなものを、おぼろげながら感得するにいたつたのであろう。そして、「永生の暗示」中にいう

.....those obstinate questionings

Of sense and outward things,

Falling from us, vanishings;

Blank misgivings of a Creature

Moving about in worlds not realized.

(五官と外界の事象に対する執拗な疑問、喪失と消失の感じ、理解されない世界を模索してまわる生物の空漠たる疑惑。)

とは、このような幼少時の、彼の内心の消息をつたえるものであろう。

ワーズワースが「時の諸点」のうち数えているような、記憶に残る意味深い経験を検討するとき、それらは大体二種にわかち得られるように思われる。その一つは、「いたり得べき崇高さ」をそのうちに秘めながらも、そのような崇高さを感じとる己れ自身と、このような経験のよつて来たる源である外界の事象とが異質のものであることを感じさせるたちの経験である。それは己れ自身については、何等かの意味において畏怖の感情と結びつき、また外界については動きの感覚をとまなうことが多い。そしてその殆んどが幼少時の経験である。もつともこの種の経験も、後年の彼の自然観にあとをひいてはいるが。この種の経験は、「序曲」第十一卷二七九行以下に述べられている、作者によれば彼がまだ六才に達しなかつた頃の経験に溯り得るであろう。同じく第一卷三〇九行以下に記されている、作者によれば彼がまだ十才にたらない頃の経験もこの種のものに属する。幼少の彼が大鴉の巢から卵をぬすみ取ろうとして、断崖にぶら下つているとき、「乾いた(こうこう)たる風が何という異様な声で私の耳を吹き抜けたことか。空は地上の空のようには見え、それに何という雲の動き！」と彼は語っている。その少しまえの個所には彼が小鳥のわなを山の此処かしこに仕掛けて、月や星の照る夜にそれをたずねあるいたさまを語っている。そのとき

I was alone,

And seem'd to be a trouble to the peace

That was among them. Sometimes it befel

In these night-wanderings, that a strong desire

O'erpower'd my better reason, and the bird

Which was the captive of another's toils

Became my prey; and when the deed was done

I heard among the solitary hills

Low breathings coming after me, and sounds

Of undistinguishable motion, steps

Almost as silent as the turf they trod.

(私はただひとりで、その丘々の間にある平和をみだす存在であるような気がした。このような夜間の彷徨の際に、時折強い欲望が私の善き理性を圧倒し、他人のわなにかかった鳥を自分の獲物にすることもあった。そんな所業を働くと、淋しい丘々の間に私をつけて来る低い息づかいや、それとつきとめがたい動きの音、その踏む芝生のように静かな足音を私はきいたのである。)

とある。このような、己れと外界の事物との間の異質感をもつとも顕著に示しているものは、ホークスヘッド時代にアルズウォーター湖で経験した、ボート無断漕出しのエピソードであろう。この冒険があった後、彼の脳裡に「日頃目にする事物の親しみ深いがた——木々や海や空の形、あるいは緑の野の色は消え失せて、替りに生きものならぬ巨大で強力な力なたちが、生ける人々のように昼中は私の心の中を徐々に動き、私の夢のわずらいとなった」と語っている。ここでは明らかに、この「未知の存在形態」は人間とはちがった範疇に属し、彼をおびやかす、気味悪い存在として受けとられている。

彼がもともと「序曲」の中に組み入れる筈のものとして執筆した *Nutting* なる短章の中に、ホークスヘッド時代にひとりて遠くの森に木の実採りに出掛けたときの出来事が描かれている。彼はたまたま、まだ誰も手をつけていない、実を一杯につけたはしばみの樹を見つけた。

I came to one dear nook

Unvisited, where not a broken bough

Drooped with its withered leaves, ungracious sign
Of devastation ; but the hazels rose
Tall and erect, with tempting clusters hung,
A virgin scene ! — A little while I stood,
Breathing with such suppression of the heart
As joy delights in ; and with wise restraint
Voluptuous, fearless of a rival, eyed
The banquet ;

(私は、しなだれてその葉は枯れ、すべてに荒らされたしるしを不愉快にとどめているような枝の一本もない、うれしや誰も訪れたことのない一隅にやつて来た。そこにはすらりと高く、鈴なりの実をつけて人眼をそるはしばみの木立があるのだ。それは手つかずの乙女ともうへき眺めだった。——しばし私は、うれしきにおどる心を押えて息はずませながら立っていた。そして舌なめずりしながら、競争者はいないぞときかしくも己れを制御しながら、この素敵なごちそうに目を楽ませた。)

しばし手を控えて、足元の花をいじったり、そばの小川のささやきに聴き入ったりしていた彼は、やがて枝をたわめ、荒々しく実をもぎにかかると。

Then up I rose,
And dragged to earth both branch and bough, with crash
And merciless ravage : and the shady nook
Of hazels, and the green and mossy bower,
Deformed and sullied, patiently gave up
Their quiet being : and unless I now

Confound my present feelings with the past,
Ere from the mutilated bower I turned
Exulting, rich beyond the wealth of kings,
I felt a sense of pain when I beheld
The silent trees, and saw the intruding sky. —
Then, dearest Maiden, move along these shades
In gentleness of heart; with gentle hand
Touch — for there is a spirit in the woods.

(それから私は立ち上つて、小枝も大枝も、乱暴に音たてて地面に引きずり下した。するとしばみの小暗い茂みと苔蒸す緑の木蔭は形を歪められ、汚されて、辛抱強くその静かな身をまかせた。私の現在の気持を過去のそれと混同しているでなければ、枝をもがれた木蔭から、王者の富をもしのご豪華な気持で有頂天になつて目をそらすまえに、黙然たる樹々を眺め、そこに闖入して来た空を見たとき、私はいたましい感じにおそわれた。——だから、愛する乙女よ、この木蔭をやさしい心づかいで通りなさい。やさしい手で触れなさい——森にはある霊がいるから。)

ここにはワーズワースの詩には珍らしくあらわに性的な比喩が用いられている。先きのわなで小鳥を捕えたときのことを述べた「序曲」中の一節と同様、ここでも自然に対して己れのなまの欲望をほしのままに棄揮しようとする人間は、自然の秩序の破壊者として、自然への闖入者として見られている。したがつて自然はその場合、無言の警告者として、彼をおびやかす存在として立ちあらわれる。彼をつけ来る「低いいきづかい」「静かな足音」がそれである。

Nutting にあつては、更に微妙な表現をとつているが、それは「黙然たる樹々」であり、「闖入し来たつた空」である。少年ワーズワースはそのおびやかす、己れとは異質の存在を「ある霊」‘a spirit’ として受けとつているのであ

以上にあげた経験は、その主人公が何等かの意味において、良心にとがめる行動をとったときに、自然のとる表情であるが、このように自然と人間との間の異質性を感じさせる経験は、必ずしも経験者の罪の意識に裏づけられた行動にともなうものではない。先きにあげた「序曲」第十一卷二七九行以下に述べられている経験がその例である。また幼少時の彼が友達とともに氷結した湖面を夢中になつてすべっているとき

..... the distant hills

Into the tumult sent an alien sound

Of melancholy,.....

(遠くの丘々はこのさわぎにもがなしい、異質の物音を送り来たつた。)

とある。

以上のような、自然と人間との間に異質的なものを感じさせる経験に対して、やはりワーズワースの幼少時から見られるものであるが、己れと外界——宇宙との間のすきまのない一体感を感じさせるたちの神秘的経験がある。この種のものとして、「序曲」で扱われている最も初期のものは、ホークスヘッド時代、彼が早朝ひそかに下宿の戸口のかげがねを外して外に出て、丘の高みに腰を下して溪間を見下している際に感じたもの——

「かくも淨らかな静けさが私の魂にみちわたつて、私は肉眼のあることを忘れ、私の見るものが私のうちなるもの、一つの夢、心の中の眺望のように思えた。」

とあるものである。これは彼が同じ頃、「唯心論の深淵」から己れを救い出そうとして、通学の途中、幾度も樹木や壁をつかもうとした経験に対応するものであろう。この場合くだんの経験は、目にするところの自己の肉体的存在を舍

む外的な事象が客観的な存在であるか、それともそれらはあげて己れのうちなるものであるか、という二者択一的な関係でとらえられているのであるが、共通の面を基盤にしての自他の対立、己れと外界の事象との関係が意識され、反省されているわけではない。

ところがホーナムヘッド時代の終り頃の彼の心境を描いたくんだりは次の通りである。

I still had lov'd

The exercise and produce of a toil
Than analytic industry to me
More pleasing, and whose character I deem
Is more poetic as resembling more
Creative agency. I mean to speak
Of that interminable building rear'd
By observation of affinities
In objects where no brotherhood exists
To common minds. My seventeenth year was come
And, whether from this habit, rooted now
So deeply in my mind, or from excess
Of the great social principle of life,
Coercing all things into sympathy,
To unorganic natures I transfer'd
My own enjoyments, or, the power of truth
Coming in revelation, I convers'd

With things that really are, I at this time
Saw blessings spread around me like a sea.
Thus did my days pass on, and now at length
From Nature and her overflowing soul
I had receiv'd so much that all my thoughts
Were steep'd in feeling; I was only then
Contented when with bliss ineffable
I felt the sentiment of Being spread
O'er all that moves, and all that seemeth still,
O'er all, that, lost beyond the reach of thought
And human knowledge, to the human eye
Invisible, yet liveth to the heart,
O'er all that leaps, and runs, and shouts, and sings,
Or beats the gladsome air, o'er all that glides
Beneath the wave, yea, in the wave itself
And mighty depth of waters.

— The *Prelude*, II, 396-428.

(私はつねに、分析的な作業よりも私の好みに合っているし、また分析的作業にくらべて創造活動により似ているためにより詩的な性格をもつと考えられるところの、ある操作の実行とその成果を愛していた。それは普通の人々には何の似よりもないと思えない事物の間に類縁性を見出すことによつて築き上げられた、果てしない建造物のことを言っているのである。私は十七の年を迎えたが、このような習慣がいまや私の心に深く喰ひこんでしまったために、あるいはあらゆる事物を融和に駆り立てる生命の社会的大原則の過剰の故に、私は無生物の世界に自分自身の欲びを持ちこんだというわけなのか。それとも、真理の力が啓示のように私を訪れたために、私は実在する事物と話を交したという

ことか。いずれにしても、当時私は至福が私のまわりに海のようにひろがっているのを認めた。このようにして私の日々はすぎ行き、いまや私は、「自然」とそのみちあふれる魂からあまりに多くのものを受けとったため、私の考えの一切に感情が深くしみ通るにいたった。私は言語に絶した至福の状態にあつて、実在の情感が、動く一切のもの、静止するように見える一切のもの、思想と人間の知識の及ばぬ彼方にあつて、人の眼にこそ見えぬ、心には生きていると感じられる一切のもの、跳び、走り、叫び、歌い、歓びの空をばたき一切のもの、波の下、いや、波そのものの中や、わたつみの底をすべりゆく一切のものの上にみちひろがっていると感じて、はじめて心やすらぐであつた。

ここにいたつて、外界の個々の事物を結びつける原理を己れの観察から得きたつた作者は、更には己れの歓びにみちた心をもつて他を推し、歓びが己れをめぐる一切のものに充ちひろがっていると感ずるようになる。万物一体といった神秘的經驗を體驗しながら、その反面に自他を弁別しつつ、観察し、思索する作者のすがたが描かれている。

作者は分析的な心の働きの対立するものとしての総合的な心の働きの自覚しながら、これを己れの神秘的體驗に適用しているのである。

ワーズワースは一七九七年にケムブリッジに入学したが、それとともに彼の生活環境は一変した。しかしここでも、少しく落着きをとり戻した時分になると、彼は時折人界を去つて、ひとり郊外の野に立ち、蒼天を仰ぐのであつた。彼はこのようなとき、久々に接する自然に対して、心は新鮮に、活発に働き、今更のように自然に対する己れの感能力のゆたかさど、これまでにつちかつて来た自然に親しむ習慣の持つ意義を思い知らされるのであつた。そして彼は、これまで交わつて来たよりも一段と深い真理と交通するようになったことを自覚したのである。

A track pursuing not untrod before,

From deep analogies by thought supplied,

Or consciousnesses not to be subdued,

To every natural form, rock, fruit or flower,
Even the loose stones that cover the high-way,
I gave a moral life, I saw them feel,
Or link'd them to some feeling: the great mass
Lay bedded in a quickening soul, and all
That I beheld respired with inward meaning.

— *The Prelude*, III, 121-9.

(以前にたどつた道をたどつて、思想のもたらす深い類推からして、あるいは押さえんとして押さえるを得ない意識からして、自然のあらゆるかたち——岩、果物や花、いや大道を掩つて散在する石にまでも、私は倫理的生命を与えた。私はそれらが有情のものであると知った。あるいはそれらにある感情に結びつけた。巨塊が潑刺たる魂の中に埋まり、見るものすべてが内的意味をたたえて息づいていた。)

ここで「以前にたどつた道をたどつて」とあるのは、ここに述べる思索と経験はホークスヘッド時代の終り頃に彼のたどつた思索と経験と同質のものであり、その継続、発展であることを示すものであろう。アーサー・ビーティーはこの辺の敘述を解して「若い詩人は『最高の真理へと向上しつゝあつた』のであるが、それにまだ到達するに至つていなかった。というのは『空想』の支配下にあつて彼は現実の世界を単に彼自身の思想の供給する『類推』を通じて見たからである。」^(註2)と説いているのはどうであらうか。ここには先きの引用章句のうちに「押さえんとして押さえるを得ない意識からして」とあること、また「類推」*'analogies'*に「深い」*'deep'* という形容詞がつけられていることに注意したい。成程ワーズワースは万物一体の神秘的経験を解釈するにあたって、己れをかえりみ、己れをもつて他を推すの知的態度に出ているであらうが、そのように知的な「類推」は実は詩人ワーズワースのものの本質を見透す深い直観に

導かれてなされているのである。少くともワーズワース自身はそう考えていた。このことはある程度ホークスヘッド時代の経験についても言われ得るであろう。この時代の心境を述べた先きの引用箇所中には「それとも真理の力が啓示のように私を訪れたため」とことわり書きがしている。このくだりについてはエミール・ルグイが「目に見える世界に生命とあたたかさと色彩を賦与するこの働きは、我等にして彼（ワーズワース）を信ずるならば、詩的天才の精髓に外ならない。茲後、彼は創造的想像力、*the creative imagination*」を⁽⁴⁵⁾かち得るのである。」と説いているのに傾聴したい。

尚、ケムブリッジ時代に入ってから経験の語ったくだりに「*To every natural form... I gave a moral life*」とあるのが注目される。先きに言及した己れと外界との間の異質性を感じさせる経験にあつても自然は己れをとがめる意味においてモラルな存在として受け取られているが、ここでは「深い類推」によつて、自然も己れと同質の倫理的存在としての生命を賦与されているのである。尚、空間的なひろがりの感覚がこの際の神秘的体験にも如何に深い関係をもつて来ているかは

..... *the great mass*

Lay bedded in a quickening soul, and all

That I beheld respired with inward meaning.

の数行を考えてもうなずかれるであろう。

ケムブリッジ卒業後、しばらくのロンドン生活の後、彼はフランスに渡つて約一ヶ年をその地にすごしたが、この間に彼の関心は自然から人間へと大きくゆれ動いた。その後彼は深刻な精神的危機をのり越えて、遂にワーズワース独自の自然観と詩風を確立するにいたる。彼が己れの本領を悟得した以後の、一七九八年頃のワーズワースの心境は「ティンターン・アベイ」のうちに敘述されている。そしてこの詩篇中の、ケムブリッジ在学時代を描いてこのかたともいう

へき、万物一体感の敘述のうちには、この神秘的經驗のもつとも崇高化し、哲学化された表現に出逢うのである。このとき彼はすでに「人間性のかなでる静かな悲しい楽をききながら自然を眺める」心境に到達していた。曰く――

I have felt

A presence that disturbs me with the joy

Of elevated thoughts ; a sense sublime

Of something far more deeply interfused,

Whose dwelling is the light of setting suns,

And the round ocean and the living air,

And the blue sky, and in the mind of man :

A motion and a spirit, that impels

All thinking things, all objects of all thought,

And rolls through all things.

(私は高遠な思いのもたらす歡喜で私をゆするある存在を感じるようになった。それは遙か深く混り合つた、あるなにものかの崇高な感じ、その住み家は落日の光であり、円かなるわたつみであり、生ける大氣であり、青空であり、また人の心のなかにあり、あらゆる思考するもの、あらゆる思考のあらゆる対象を動かし、万象を貫き流れる運動であり、ま精神であるものだ。)

ここにいたつて、今まで考察して来た二種の、一見互いに矛盾する經驗が、回想のうちに、多年の思索と瞑想を通じて合一され、深く豊かな表現を得ていることをわれわれは感じないであろうか。彼が幼少時に深夜の風音のうちに感じとつた ‘possible sublimity’ がこゝにたつたつて ‘a sense sublime Of something far more deeply interfused’ とつ

た内容のものに転化して来ている。そしてかつては己れに対しては異質のもの、己れの心をおびやかす存在として受けとられた、'a spirit'、または 'unknown mode of being' は、「あらゆる思考するもの、あらゆる思考のあらゆる対象を動かす、万象を貫き流れる」ところの 'the mind of man' をも包含する 'a motion and a spirit' として受けとられている。そしてわれわれはこの章句のうちに、いままで考察して来たワーズワースに特有の、空間的感覚とそれに関連した運動の感覚——広大無辺の空間にわたる大気の動きの感覚——の精妙な精神化スピリチュアライゼーションを感じないであろうか。筆者はワーズワースの成年時に到達した思想は、その根本において、幼少時からこのかたの、彼の異常なままの感覚的体験の反省と合理化のころみの過程に形成されたものと考えるものである。「ティンタン・アベイ」中の上記の章句にあらわされている思想については、デイヴィッド・ハートレーの心理学説の圧倒的な影響を認めるもの(註4)、これはゴドウィン(註5)の「必然と相互連関」の考えの具現に外ならぬと考えるもの、あるいはフランス革命前後のフランスの諸哲学の思想に由来すると論ずるものなど、諸家(註6)いろいろな角度からいろいろな説を立てている。筆者も、上記の諸思想を生み、あるいはそれら諸思想の支配下にあつた、当時の「思想的風土」の影響を、若きワーズワースが何等かの意味において受けているであろうことを否定するものではない。しかしそれら先人の思想がワーズワースに影響——この影響の意味が問題であるが——したのも、根本的にはワーズワースの幼時から一貫しての深い、独自の体験があつての上のことである。先人の示唆による合理的解釈の施される対象としての体験そのものは、決して他からの借りものでなく、詩人ワーズワースに本来のものであつたことを忘れてはならない。そのように、強く、深い体験の流れなくして、どうして「序曲」のような、一貫して読者の心の奥底に訴える記録が生れ得よう。もし他からの借りものでこのような精神的自叙伝を書き得る人間があれば、それは超人であろう。「序曲」のうちに、彼の少時に体験したものと記されている神秘的体験が、実は一七九七年以前の作品中には全然触れられていないことを根拠にして、ワーズワースは後年にいたって獲得し

た体験を「序曲」その他で幼少時に溯らせて記述しているのだと論ずる人がある。しかし、それはワーズワースに独自の体験が、そも如何なるたちのものであるかを充分に検討しない者の下す軽卒な結論ではなからうか。

II

ワーズワースは生来自然に対する異常な関心と情熱のもちぬしであった。彼がホークスヘッド在学時代に書いたいろいろな詩作品は、人事を描くにあたつても自然界の心象にたよること多く、自然を通して人事を眺め、人事の背後に自然を見るといった傾向が強い。そしてこの傾向は成年時のワーズワースの作品にも顕著に認められる特色である。彼は人事を常に自然と関連させて考え、感じるために、人間を描き、人事を述べる場合も、それらを自然界の現象や事物になぞらえて言いあらわそうとする傾きが強い。そしてこのことは、彼の場合、他の詩人に一寸見られない位に徹底しているように思われる。

「序曲」中には、第六卷以下に、フランス革命に関連した敘述がよく出て来るが、革命という事柄自体がもつとも人間くさく、そして血なまぐさい事柄だけに、人事をもつて人事にたぐえるのがもつとも自然なやり方のように思える。ところがこのような事柄の敘述にも、彼は遠慮なく、人事現象とならんで、自然現象や自然の事物の比喩を持ちこんでいるのである。

彼はケムブリッジ在学中の最後の夏期休暇に大陸の徒歩旅行を敢行している。当時フランスはすでに革命勃発後一ケ年を経過し、この国の人心は湧き立っていた。しかしフランス革命の標榜する自由、平等、友愛の精神は、もともと幼時からデモクラティックな環境に育ち、デモクラティックな教育を受けて来たワーズワースにとっては極めて当然のことと思えたのであろう。したがって各地を通過する際に、革命にくみする人々の言論に接し、その雰囲気のなかに入っ

ても、彼自身は何の異和感をも覚えなかつたらしい。彼は已れのこの心境をたとえて

I seem'd to move among them as a bird
Moves through the air, or as a fish pursues
Its business, in its proper element;

— *The Prelude*, VI, 697-9.

(私はそれらの間を、鳥が空中をすぎ行くやうに、または魚がその本来の住家である水中で本来の活動にしたがうやうに、通りすぎぬ気がした。)

と語っている。彼はケムブリッジ卒業後、再度フランスに渡つたが、渡航早々には、フランス全土が革命にはげしくゆれ動いていたにもかかわらず、彼は異国の習俗に異邦人としての好奇の眼こそ燃やせ、革命自体には何等本質的な関心も興味も寄せなかつた。この心境をたとえて

I scarcely felt

The shock of these concussions, unconcerned,
Tranquil, almost, and careless as a flower
Glossed in a Green-house, or a Parlour shrub
When every bush and tree, the country through,
Is shaking to the roots.

— *The Prelude*, IX, 85-90.

(私はこれら激動の衝撃を殆んど覚えせず、無関心で、平然と言つていい気持であり、戸外ではその国をおしなべて茂みという茂み、樹木という樹木の一切が根元までゆり動かされているというのに、温室のガラスのフレームにかこまれた花か、居間の鉢植えかなんぞのやうに、まったく呑気なものであった。)

と述べている。しかし彼もそのうち、親しく接する異国の革命さわぎに青年らしい情熱を寄せるようになったが、前途に洋々たる希望の感じられていた革命の初期の頃、若くして人類革命の黎明期にめぐり合わせた身の仕合わせを痛感して

Bliss was it in that dawn to be alive,

But to be young was very heaven.

— *The Prelude*, X, 693-4.

(そのあかときぎに生きてゐることは幸福のきわみであつたが、若いといふことは天国そのものであつた。)

とうたい上げている。しかし、革命の様相はその後次第に陰惨なものに変わり行くこうとして、一七九二年秋には「九月虐殺事件」が突発して起つてから二ヶ月とは経ない頃に、ワーズワースは帰国の途、パリに立ち寄つてゐるが、深夜宿でひとりこの事件について思いに耽つてゐるうちに、異邦人の自分自身がいつこのような惨事にまき込まれるかも知れぬことに思ひいたつて、慄然とする。このときの心境を語つて

..... it seem'd a place of fear

Unfit for the repose which night requires,

Defenceless as a wood where tigers roam.

— *The Prelude*, X, 80-2.

(それは夜とらねはならぬ憩いにおよそみさわしからぬ恐ろしい場所、猛虎の群の徘徊する森林のように思えた。)

と書きしるしてゐる。

先きにあげた章句の中で、彼は已れを空行く鳥に、また水中に食をあさる魚にたとえてゐるが、彼は時に已れを「の鹿」*a roe* にたとえ、あるいは幾個月かにわたつてロンドン市中を彷徨してまわつてゐた已れ自身の姿を(必ずし

も適切な比喩とは思えないが)丘の牧場を自由に走りまわる小馬にたとえている。時に彼は進んで己れを自然界の無生物にたとえることをも辞せない。「水仙」の詩の冒頭に、己れを空をただよう雲にたとえたときのように。このうちもいつも変った例をあげれば、自然のきびしい面へのみ関心を向けていた若い頃の己れの魂を、急流にぶつかって飛沫をあげ、轟々たる音をたてる岩石にたとえていることである。そしてそのような魂に、後年にいたって自然のやさしい、こまやかな面に対する目を開かせてくれた妹ドロシーの心遣いを、くだんの急流に泡立つ岩石の割れ目に花を咲かせ、灌木をしげらせ、そこに小鳥の巢をいとなませた造化の力にたとえているのである。

My soul, too reckless of mild grace, had been
Far longer what by Nature it was framed,
Loner retain'd its countenance severe,
A rock with torrents roaring, with the clouds
Familiar, and a favorite of the Stars :
But thou didst plant its crevices with flowers,
Hang it with shrubs that twinkle in the breeze,
And teach the little birds to build their nests
And warble in its chambers.

— *The Prelude*, XIII, 228-36.

(私の魂は優美な趣きに対してあまりにも無関心であり、あまりにも久しきにわたって自然の荒けずりのままに、そのきびしい相貌をたもちつづけて来た。それは激流がぶつかって怒号し、雲と親しく、星々の寵愛をうける岩石であった。しかし貴方はその割目に花を植え、灌木を垂れ下らせてそれを風にきらめかせ、小鳥にその部屋部屋に巢を作り、させることを教えたのだ。)

ドロシーといえ、ワーズワースは「序曲」中の別の個所で、己れとドロシーとの人生行路における触れあいを、小
道と小川との關係にたとえて描いてゐる。

..... like a brook

That does but cross a lonely road, and now
Seen, heard and felt, and caught at every turn,
Companion never lost through many a league.

— *The Prelude*, X, 911-4.

(淋しい道ぎ、かつて一度だけよぎつたことがあったが、いまでは見られもし、聞かれもし、感じられもし、そして曲
り角にさしかかるたびに出逢ひもするところの、幾リーグにもわたつて道づれになつてくれるささやかな流れのよう
に)

またある場合には、彼自身を道行く旅人に、妹ドロシーを、小鳥に、光の閃めきに、花の芳香にたとえさせしてい
る。

Where'er my footsteps turned,

Her voice was like a hidden Bird that sang;
The thought of her was like a flash of light
Or an unseen companionship, a breath
Of fragrance independent of the wind.

— 'On Nature's Invitation Do I Come', II, 20-4.

(私の足の向うところいずこにも、彼女の声は、姿を見せずに鳴く鳥の音のようにきこえて来た。彼女への想いは一条
の光のひらめきのように、または見えざる同伴者、風なきににおい来る一抹の芳香のようであった。)

己れと妹ドロシーとの関係を旅人と小鳥、光、あるいは芳香に比するところ、論理的に考えればいささか不整合の感をまぬかれないが、この場合の比喩といい、先きの小川の比喩といい、まことに幽婉の趣きにとんだものと言わざるを得ない。いずれにしても、ワーツワースの人事の敘述に自然の現象や事物を用いること、このように徹底しているのである。

しかしここで本題にもどつて、このように人事に自然の比喩を適用するに際して、いままで考察して来たワーツワースに特有の空間と運動の感覚が一種特別の役割を果している例をここに採り上げたい。それは「決意と独立」 *Resolution and Independence* に出て来る蛭取りの老人の描写についてである。作者がここに珍らしいダブル・シミリを用いていることについては別稿に触れたが、その原文をここには再度引用することにした。

As a huge stone is sometimes seen to lie

Couched on the bald top of an eminence;

Wonder to all who do the same espy,

By what means it could thither come, and whence;

So that it seems a thing endued with sense:

Like a sea-beast crawled forth, that on a shelf

Of rock or sand reposes, there to sun itself;

Such seemed this Man, not all alive nor dead,

Nor all asleep — in his extrem old age:

His body was bent double, feet and head

Coming together in life's pilgrimage;

As if some dire constraint of pain, or rage

Of sickness felt by him in times long past,
A more than human weight upon his frame had cast.

Himself he propped, limbs, body, and pale face,
Upon a long grey staff of shaven wood:

And, still as I drew near with gentle pace,

Upon the margin of that moorish flood

Motionless as a cloud the old Man stood,

That heareth not the loud winds when they call;

And moveth all together, if it move at all.

(むき出しの山嶺に巨大な石がうずくまつて、どのようににして、どこからそこに来たかと、見る者のすべてに不審をいだかれることがある。それは五感を具えたもののように見えるのだ。日浴びるため、このこはい出して、張り出た岩や砂の上に休んでいる海獣のように。そのようにこの人は見えた。あまりに年老いて、生きていても、死んでいるとも、眠るともつかず。彼のからだは二重にまがり、足と頭は長い遍歴の末に相合おうとしていた。あたかも、遠い昔にうけた苦痛のおそろしい重圧や、病気の猛威が、人間に堪え得ない重みを彼の体軀に加えたかのように。彼は木を削った長い灰色の杖で、自分の手足と、胴体と、青い顔をささえていた。そして私がゆるやかな足どりで近づくと、沼地の水溜りといった小池のほとりに、この老人はじつと立っていた。風が吹きすすんでも耳をかさず、いざ動けば一団となつて動く雲のように。)

このダブル・シミリの生み出す異様な、しかし不思議に感銘深い効果の秘密はどこにあるのであろう。そしてそれは読者の心にどのようなことを語りかけるのであろうか。恐らくそれは、「決意と独立」全篇の構造のうちに占めるこの比喩の役割を吟味することなくしては充分の解答は得られないであらう。しかし、ここでは暫らくこの引用箇所のみ

に問題を限つて考察を加えて見たい。

この風変わりな比喩の目指す狙いについては、作者ワーズワースが、詩的想像力の果す働きの複雑微妙さの一例として、次のような解説をしている。

「これらの心象イメジエズにあつては、直接に、あるいは間接に働くところの想像力の、つけ加えたり、とり去つたり、変化させたりする力の一切が協力させられている。石はそれを海獣に近似させるような何等かの生命力を賦与され、また海獣はそれを石に近づけるために、その生物としての性質の幾分かを奪い去られている。そのような中間的な心象が扱われているのは、石という当初の心象をこの老人の姿と状態になるべく近づかせようとする目的のためなのである。この老人は生命と運動を暗示するものを多分に喪失した結果、先きの二つの事物がひとしい関係において結合し、協力する点にまで到達しているのである。(註)」

作者ワーズワース自身による、創作者の立場からしての、この味わうべき解説に対して、筆者は詩の享受者としての立場からいささか補足的説明を加えて見たい。この比喩のもたらす効果はまことに複雑であるが、手短かに評すれば、それは矛盾、不均衡のもたらす異様な調和に対する驚きと畏怖といったものではなからうか。現実に見る老人は極度の老齢と病苦のためにやせ衰えて、わずかに細い杖に身を托している、外見上はまことにひよわな存在である。ところが作者は、たとえその動きのなかで似かよふ点があるにせよ、この弱々しい老人の姿から直接には巨石や、間接には海獣のような、外面的には雄大な、あるいはたくましい存在を聯想している。読者はそこに矛盾と困惑を感じないわけに行かない。しかし読者は、ここに持ち出された巨石の比喩そのもののうちに、似たような矛盾と困惑を感じさせられることに気づく。「むき出しの山嶺」にうづくまるとのつかっている巨石そのものが驚きの種なのである。この石はその巨大な重量とその現在ある山嶺の位置から考えて、とてもそこに移動して来たものとは素人目には考えられない。

しかしこの巨石の性質と、それを支えている山上の土質との関係から考えるとき、この石はどうしても他所から移動して来たものとしか解釈のしようがない。この意味で、それは「静」中に恐るべき「動」を包蔵している感じの石なのである。

ところで、この巨石が山嶺にせせり出ている姿、恰好は、海辺の岩棚が砂地に日向ぼっこをするためにはい上って来ている海獣の姿を聯想させる。またこのようにたとえられることによって、山嶺の巨石の姿は一層あざやかに読者の心眼に印象づけられる。しかも読者は、この新たな心象の導入によって、更に空想をそそられる。もしこの巨石にして、実際にこの山上に移動し来ったのなら、その動きは恐らくここに持ち出された海獣の陸上における動きのように、恐ろしく緩慢なものであつたらうと。そしてここにいたって読者は、この新たな海獣の心象のうちに、先きの巨石の心象に似た「静中動」の趣きがこめられていることに気付かせられる。海獣は、陸地にはい上つたときこそ、その動作は緩慢でぎこちないが、一たび水中にもぐらんか、その動作は打ってかわって驚くべく敏捷、軽快かつ優美なのである。そして海獣に見られる、陸上と水中におけるこの静動の対立は、はね返って巨石の比喩そのものに微妙な含みをもたらず。地上ではどこでも動かぬようにどっしりとして見える巨石も、水中にあつてはいと軽々と驚くべき遠距離に移動することは、水涸れの河床にわれわれのよく実見するところである。巨石の比喩をこの詩中に持ち出したとき、作者はこの事実を充分に意識してのことであつたであらう。実際に、カムバーランド地方の丘上に腰をすえている巨大な漂石 'boulders' の存在は、当時の地質学者を悩ます難問であつた。ここにはワーズワースの「湖水地方案内」 *Guide to the Lakes* に収載されている、ワーズワース宛ての書簡の体裁をとつた、セズウィク教授の湖水地方の地質学的解説の一節を引用したい。

「移動した漂石で……時に何トンという重量のものが、まことに奇妙な、説明に苦しむ場所に存在することがあ

る。……それらは丘の頂上に、しかも大きな亀裂や谷を越えて漂いつているのである。そういつた石が多数に、ケンダルとセドバーの間の高い丘々に見出されるが、それらは今では少くとも深さ数百フィートといった谷を越えずには到達出来ないような地点に存在しているのである。ここにはみかげ石その他の堅い岩石の漂石で、カムバーランドの西の谷から漂いでて、ランカンシアとチェンシアの平原をよぎり、チェンシアとダービニアの間の丘々のまさしく頂上に漂いつているものをあげて置こう。」^(註8)

「巨石と海獣の両者にこもる「静中動」の趣きは、引用の最後に見られる比喩、「風が吹きすさんでも耳をかさず、いざ動けば一団となつて動く」雲に引きつがれて、老人の静かな姿の強化に役立たせられていることは、ここに附言するまでもあるまい。

ここでふたたび、この二重（あるいは三重）の比喩の対象になった蛭取りの老人の姿にかえろう。先きに考察した山巔の巨石の提示する矛盾は、矛盾でありながら肯定せざるを得ない現実の事実である。とすれば、一見ひよわしい姿の老人が壮大な巨石に似かよつて見える矛盾も、また現実存在して不思議はないのではなからうか。もしこの老人にして、その外見に似あわぬ、異常な人間的壮大さ、乃至強靱さをそのうちに「静中の動」としてひそめているならば、作者はこの老人のうちに何を見ているのであろう。

先きに引用した作者自身の解説のうちに、「石という当初の心象」という言葉がある。作者ははじめからこの老人を石になぞらえようとしていたのである。また「この老人は生命と運動を暗示するものを多分に喪失し……」という言葉がある。これらの言葉の包蔵する言外の意味について、も少し立ち入つて考えて見たい。

ワーズワースの作品に「動物の静けさと衰え」 *Animal Tranquillity and Decay* という変つた表題の詩がある。

内容は次の通り。

The little hedgerow birds,

That peck along the road, regard him not.
He travels on, and in his face, his step,
His gait, is one expression : every limb,
His look and bending figure, all bespeak
A man who does not move with pain, but moves
With thought. — He is insensibly subdued
To settled quiet : he is one by whom
All effort seems forgotten ; one to whom
Long patience hath such mild composure given,
That patience now doth seem a thing of which
He hath no need. He is by nature led
To peace so perfect that the young behold
With envy, what the Old Man hardly feels.

(往來に餌をあさる垣根の小鳥も彼を無視している。彼はあゆみつつけるが、顔と足どりと身のこなしに見られる表情は同じだ。手足も、目付きも、かがんだ姿勢も、すべてが苦痛を覚えないで何かを思いつめながら動く人を語っている。彼は無意識に自分を抑えて、落着いた、静かなものごしになっている。彼は一切の努力を忘れ去った人のよう、久しきにわたる忍耐が穏やかな落着きを生み出し、そのために忍耐も今や必要でなくなった人のように見える。彼は自然の導きでまっただき平和に達し、そのため若者らは羨望のまなこで、当の老人が殆んど気付かないものを見るのだ。)

人はワーツワースの言、「人間本来の、生地のままの高貴さ」, *native, naked dignity of Man* をよく口にすることが、詩人自身が人間の高貴さについて果してどのような考えを持っていたか、充分の吟味を加えたことがあるであろう

か。われわれはいま引いた小詩のうちに、詩人ワーズワースの独自の人間観の片鱗を見る。彼は人間の生物的、動物的な老衰現象の裏に、常人の見のがしがちな、否、認めようとすらしなものをも鋭敏に看取する。動物的な無意識さで忍耐を身につけ、そして「垣根の小鳥」にすら無視されてあゆむ路傍の老人から、人間の高貴さの輝き出るのを彼は覚えるのである。そして、蛭取りの老人は、この路傍の老人にうかがわれるワーズワースの人間観が、一段と壮大化され、詩的にされたものといえよう。しかし、ワーズワースの人間観の全貌をいま詳細に検討する余裕はない。

ここにはライオネル・トリリング教授の、この問題についての明快な——いささか割り切りすぎた感もしないではないが——解説を引用するにとどめたい。

「ワーズワース風の勇氣、*courage*、はバイロン風のそれとは性質を異にする。まず第一に、それはそれ自体を決して意識しない。それは殆んど個性的とは言えない。それはもの言わぬ、感性なき事物のもつ勇氣である。そしてしばしば詩的にはそのような事物——岩や、石や、樹木や、星と結びつけてあらわされる。……きんぼうげについては、その剛毅さはその勇氣にあるのでも、その選択行為にあるのでもなくて、その老いることの必然性にあると詩人は言う。同じことはワーズワース風の勇氣のあらゆる好適例についても言われ得る。彼等は彼等が本来あるところのものであるが故に耐えしのぶのである。そしてわれわれは、彼等は一種の生物的信念の故に生き抜くのだと言つてもよい位なのだ。そしてその生物的信念たるや、殆んど動物的、または植物的信念であり、いや一歩進んで……時に殆んど鉱物的信念でさえあるのだが、それにもかかわらずそれは人間的なのである。武器をとる『幸福な戦士』でさえ、その勇氣を彼の戦闘的精神から得来たらずに、ものの掟に対する彼の平静な服従から得来たつているのだ。」(註9)

病苦と老齡に身を打ちひしがれながら、よるべのない身でなお人にたよることなく、沼から沼をわたりあるいて乏しい蛭を取ることによつて身すぎをしながら、そのことをあたりまえのこととしか考えていない、この柔和で折目正しい

老人こそ、ワーズワースにとつてまさに剛毅そのものの化身と思われたであろう。この蛭取りの老人は、ワーズワースの詩的想像力のつくり出したもつとも異色ある、そして詩的含蓄にとんだ人間像である。そしてこの人間像が、これまで考察して来た、ワーズワースに特有の集塊とその運動の感覚のいわば裏返しへの表現とかく結びついている点に、筆者は深甚の興味と関心を覚えるものである。

註

- (1) *Literary Criticism of William Wordsworth*, ed by Paul M. Zall, 1966, p. 148.
- (2) Arthur Beatty, *William Wordsworth, His Doctrine and Art*, Madison, 1960, p. 170.
- (3) E. Legouis, *The Early Life of W. Wordsworth*, transl. by J. W. Matthews, p. 53.
- (4) Beatty, *W. Wordsworth*, pp. 106-7.
- (5) Thomas J. Rountree, *The Mighty Sum of Things*, 1965, p. 80.
- (6) H. W. Piper, *The Active Universe*, 1962, pp. 71-2.
- (7) *Literary Criticism of W. Wordsworth*, ed by P. M. Zall, p. 149.
- (8) *A Complete Guide to the Lakes, with Mr. Wordsworth's Description of the Scenery of the Country &c., and Three Letters upon the Geology of the Lake District*, by the Rev. Prof. Sedgwick, Kendal, 1842, Letter 1, pp. 10-1.
- (9) 'Wordsworth and the Iron Time' by Lionel Trilling, *Wordsworth Centenary Studies Presented at Cornell and Princeton Universities*, ed by G. T. Dunklin, 1951, pp. 141-2.